

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	准教授	氏名	京林由季子	印
調査研究課題	特別支援教育における新学習指導要領の展開と課題に関する検討 －武道授業における生徒の困難さの実態と対応－						
交付決定額	240千円						
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担		
	代表	京林 由季子	保健福祉学部	特別支援教育	研究の企画・実施・まとめ		
	分担者						
調査研究実績の概要	<p>現在学校教育においては、通常学級に在籍し知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒は6.5%と推定されている（文科省，2012）。このような現状を踏まえ、平成19年4月から学校教育法に位置づけられた「特別支援教育」がすべての学校において推進されている。さらに、平成26年1月の障害者権利条約の批准を受け、学校教育においても、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が共に学ぶインクルーシブ教育システムの構築に向けた取り組みの一つとして各学校は合理的配慮の提供に努める必要があることが示されている。</p> <p>ところで、小学校においては平成23年から、中学校においては平成24年から新学習指導要領が全面実施となったが、特別支援教育における新学習指導要領の展開に関する研究は極めて乏しい。特に、実技系教科である中学校体育においては、新学習指導要領により12年間を見通した指導内容の体系化という視点から、武道を含むすべての領域が必修化されたが、必修化から間もないこともあり、中学校体育授業における特別な支援や配慮に関する調査・研究は少なくその実態は明らかでない。</p> <p>そこで本研究では、特別支援教育における新学習指導要領の展開と課題について、中学校の実技教科である体育科、特に武道の必修化に注目し、武道授業の実態把握、武道の授業場面における学習面又は行動面で困難を示す生徒の実態と問題状況、対応状況について、文献調査、中学校教員への聞き取り調査等から実証的に明らかにするとともに、体育教員養成課程学生の意識調査を実施し、養成教育及び現職研修における基礎資料を得ることを目的とする。</p>						

<p>調査研究実績の概要</p>	<p>1) 中学校の武道必修化とインクルーシブ体育に向けての課題  教科体育については、身体活動を通じた学習という特徴からインクルーシブ教育の中でも実施しやすい教科としての可能性をもっていることが指摘されているが（草野2003）、現状としてはインクルーシブ体育が成立している事例や実証的な研究は少なく（金山ら、2011）、インクルーシブ体育の実践は未だ試行錯誤段階と言える。一方、障害者の体育・スポーツは、一部に特別な配慮や工夫、対応が必要とされることからアダプテッド・スポーツとも呼ばれている。日本では2005年に日本体育学会の専門分科会の1つとして、アダプテッド・スポーツ科学分科会が認められているが、アダプテッド・スポーツ科学分野からも、体育におけるインクルーシブ教育の推進は重要課題の一つと考えられている。しかしながら、中学校体育、特に武道授業における障害のある生徒への支援や配慮に関する研究はほとんどなされていない。障害のある生徒にとっては、格闘技的スポーツである武道授業は固有の困難さが生じるものと考えられるが、その一方で、対人的運動形態を通して自己の判断力を養い、相手を尊重する教育課題を担える教材である（木原、2011）との指摘もなされている。</p> <p>(2) 中学校体育教員への面接調査  中学校での武道授業の実施状況や問題状況について、中学校体育教員に半構造化面接を実施した。調査対象者は武道授業を担当するが武道専門ではない教員（柔道授業と相撲授業）である。面接は、対象者の了解を得てボイスレコーダーに記録したものをテキスト化し、データマイニングソフト（KH Coder）により抽出語リスト及び共起ネットワークを作成し、内容を検討した。</p> <p>①武道の授業実践上の問題と工夫  技能面に不安、教科書通り教えられるのかどうか。／受け身の教え方も流派によっていろいろあり本当のところはわからない。／安全面の指導を重視。／古い消防ホースで土俵俵を作るなど設備の創意工夫、等。</p> <p>②武道授業における特別な配慮や支援の状況と対応  a. 実態：1年時の最初に交流学級の中で授業が可能かどうかを見極めている。／特別支援学級では安全確保の面から武道授業は実施していない。／毎年1クラスに複数の配慮を要する生徒がいる／体育では指導者以外の教員の加配はない、等。  b. 困難：説明を理解することが難しい。／見本とは逆をやってしまう。／困難は感じない、等。  c. 対応：生徒同士でペアを組ませ相互学習を利用。／無理をさせず最低限目指すところで対応。／ドッジボールなどゲーム感覚の指導を取り入れる。／対人的な細かいルールがあるため力が発揮できる生徒もいる、等。</p> <p>(3) 中学校体育教員養成課程学生への意識調査  教育実習生として、あるいは将来の体育教員として武道授業を担当する可能性のある中学校体育教員養成課程の学生に、剣道の授業に関する意識調査（32項目）を実施した。因子分析により「伝統的剣道への志向」「剣道の理論と技術の難しさ・厳しさ」「スポーツとしての剣道」など9因子が抽出された。</p> <p>武道授業の必修化においては、その最初から、多様な生徒の参加を前提としたインクルーシブ体育に向けて、教員の武道指導の授業技量とともに特別支援教育の技量についても高めていくことが課題と考えられる。そのため、多様な事例による指導方法の工夫に関する情報の収集と分析が今後とも必要と考えられる。また、武道経験の有無により養成課程における武道授業や教員研修にどのようなニーズを有しているのか、及び、多様な生徒に関する知識や意識との関連性について調査研究により明らかにしていく必要がある。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>日本体育学会第66回大会（H27年8月）での発表を計画している。  学内開放での発表を予定している。</p>